

⑩ おさるの森の探検隊【むつ市】

訪問日：平成21年8月1日

訪問者：奥島涼子委員

対応者：事務局 松岡敦子さん ほか



- 地域の自然を歩き、地域の動植物を採求し、地域の専門家から学ぶプログラム。
- 指導者・スタッフが強い意識をもって、地域の子どもの力を伸ばすために活動。
- 地域での認知度、参加率ともに高く、信頼され認められている活動。

体験活動事業の概要

【事業名】「昆虫ウォッチング」

【事業主体】おさるの森の探検隊

【活動日】平成21年8月1日（※年9回の体験活動を実施）

【活動場所】むつ市脇野沢公民館、瀬野林道

【活動内容】（午前）林道散策、昆虫採集（午後）昆虫調べ、昆虫標本作成

【参加者】小学校1年生～6年生12名（中学生ボランティア3名）

【活動費】子どもゆめ基金等の助成金で運営。参加者は保険料と実費を負担。

地域の子どもたちを対象に自然体験活動を提供する脇野沢公民館の事業「わんぱく広場」として、平成11年に活動が始まりました。やがて公民館事業を離れ、「おさるの森の探検隊」と改称し、子どもゆめ基金等の助成金を受けながら活動を継続し、現在に至っています。組織は6名の実行委員で運営し、また講師・指導者として地元の下北半島サル調査会や元教員等、下北半島の自然活動の専門家が協力しています。その他にも、10年以上継続しているため、OBの中学生や若者がボランティアとして手伝っています。

脇野沢小学校の全学年を対象とし、春にチラシを配布して隊員を募ります。平成21年度は全校児童73名中37名が登録し、年間9回の体験活動を実施しました。内容は豊かな脇野沢の山や海、川を散策しながら、昆虫や植物の採集をしたり観察したりする活動が多く、また春から冬まで全ての季節で活動しています。子どもたちの参加率も高く、地域の子どもたちに良質の体験活動を提供する団体としてよく知られ、高く評価されています。

事務局の松岡さんは元保育園の先生で、その後脇野沢村役場に入り、公民館事業当時から活動の中心を担ってきました。下北の自然を守り、その魅力を次世代につなげ、地域の子どもたちの様々な力を伸ばしたいという思いで、運営事務から実際の子どもたちの指導まで精力的に活動しています。今回訪問した企画では参加者が12名だけでしたが、同日にむつ市ジュニアリーダー研修会が下北自然の家で行われており、松岡さんは地域の外での活動を強く勧め、21名がリーダー研修会の方に参加したそうです。脇野沢地域の子どもたちに必要な活動、経験は何かを常に考えて活動しており、そのような姿勢が、学校や保護者の信頼を得ることにつながっています。

活動の工夫、特長

- ・下北半島脇野沢地区の山や川や海の景色と生息する動植物を体感できるプログラムを、年間を通して計画しています。
- ・当初は夏場の活動が多かったが、四季による自然の違いを意識させるため、現在は1年を通してすべての季節に活動をしています。
- ・指導者や講師陣は、実際に下北の生態や環境を研究している教員や自然活動の専門家で、高度な内容を子どもたちに合わせながら解説しています。また、子どもたち自身が自ら考え、行動し、探求しようとする姿勢を大切にして指導しています。

今後の展望、課題

- ・今後も可能な限り継続していきたいが、少子化と家庭の教育に対する価値観の変化等で、会員も減少傾向にある、とのこと。
- ・中心となる実行委員が固定化し、若いスタッフや次世代の指導者が不足しています。また活動資金は助成金为中心で、必ず毎年受けられる保証がないため、不安定です。
- ・市町村合併による地域特性の希薄化、保育園～中学校まで固定した人間関係の後、地元には高校がないため全員地域の外へ出て行かざるを得ない状況、等の課題があります。



昆虫の体の仕組みを講義



活動報告の新聞を発行



訪問委員感想

- ◇脇野沢地区を丸ごと体いっぱい使って体験している。指導者は県内でも有数の優れた研究者たちで、子どもとのつながりを大切にしながら一緒に楽しんでいる。
- ◇学習内容は小学校低学年に合わせているとはいえ、専門的で環境への問いかけも含む高度なものであった。採集した昆虫の正式名称を調べたり、見分け方を考えたり、最後には感想文を紙いっぴいに書いたり、子どもたちが自発的に興味を持って参加していることが感じられた。

《奥島委員》

⑪ 山の楽校【八戸市】

対応者：楽校長 岩崎光宏さん

訪問日：平成21年8月22日

訪問者：荒瀬 潔委員、石原慎士委員
兎内佐智子委員



- 廃校を利用し、地域の自然、産業、文化、人材を有効に活用した事業を展開。
- 地域の全世帯参加による協議会形式で運営。
- 着実に来訪者が増え続け、地域活性化・文化の伝承で成果。

体験活動事業の概要

【事業主体】山の楽校（山の楽校運営協議会）

【活動日】毎週月曜日と年末年始休校。休校日以外は8：30～16：30開校。

【活動内容】野菜栽培や稲作などの農作業体験。そば打ちやせんべい・漬物・彼岸団子・干し柿作りなど食品加工体験。布草履・つるかご・ほうき作りなどの工芸体験。他に炭焼き体験や青葉湖ウォーク、星空観察会など。

【活動費】八戸市から施設の指定管理者委託を受けており、市からの委託料と、各体験活動の参加費（※活動により100円～1万円徴収）で運営。

平成15年3月に、旧南郷村立増田小中学校が閉校になりました。南郷村との合併が決まっていた八戸市が校舎等を整備し、平成17年6月に「青葉湖展望交流施設（山の楽校）」としてオープンしました。平成18年4月からは指定管理者制度が導入され、地域の運営協議会が指定管理者となり、独自の事業を展開しています。

地域の運営協議会には、増田地区の全67世帯が参加しており、住民一人ひとりの知識や技術を活かして多彩な活動をしています。講座やイベントは年間約60回、その他にも常時体験可能なプログラムを用意しています。常駐の職員は5名ですが、食品加工や工芸を担当する住民が山の楽校で作業し、来校者がいなくても味噌や漬物等を作り、道の駅で販売するなどして収益を上げています。

校舎と備品をそのまま活用し、各教室は資料室や展示室になっています。年齢を問わず、訪れた人の心に思い出や郷愁を呼び、かつてそこで育った人々の生活まで想像させます。体験活動メニューは、本格的な作物栽培体験から食品加工や工芸のものづくり体験、星空観察や青葉湖散策まで、1年を通して農村文化と四季の自然を堪能できる内容を豊富に用意しています。遠足等の行事で訪れる小・中学校も多く、また子ども会等の団体がグラウンドで運動会やキャンプを行うなど、幅広いニーズに応じて柔軟な事業運営をしています。美しい自然、魅力ある施設と活動メニュー、楽校長をはじめ地域をあげた温かいもてなしで、訪れた人は二度三度と足を運び、近隣だけでなく県外からも人が訪れるようになっていきます。

かつて学校は、子どもを中心に人々が集う地域コミュニティの中心となっていました。ですから、地域の学校がなくなることは大変なピンチとなるはずですが、増田地域はそれをチャンスに変えました。地域の自然・産業・文化・人を有効に活用し、地域の大人が集い、自己表現できる場として成功しています。

活動の工夫、特長

- ・八戸市街からの適度な距離、懐かしく素朴な校舎と美しい自然、地域住民や職員による温かいもてなしと多彩なプログラム、これらが人々を惹きつけています。
- ・住民一人ひとりがアイデアを出し、活動の主体者となるため生活に張り合いがでます。山の楽校を中心に住民同士の会話も増え、地域コミュニティが再構築されています。
- ・「田舎と自然の魅力を多くの人に知ってもらいたいし、収益を上げて地域を元気にしたい。一方で多くの人があることで環境が破壊されたり田舎らしい素朴さを失いたくない。バランスが大事。」との岩崎楽校長の言葉に、山の楽校の理念が凝縮されています。

今後の展望、課題

- ・指定管理者制度による経営のため、行政と地域との関係や資金の面、ずっと指定管理者でいられるのか、という悩みがあります。
- ・事業の拡大と環境保護のバランスをとる必要があります。
- ・組織としても拡大してきており、NPO 法人化など、組織の整理と再構築が課題です。

体育館がそば打ち等の体験会場



各教室に資料や備品を展示



山の楽校正面入口



訪問委員感想

- ◇そばの播種・収穫・そば打ちのように、中長期にわたって体験学習ができる環境を提供しており、来訪者も提供する側も1年を通して意欲的に活動できる。
- ◇地域住民が持つ知恵を生かした活動メニューを積極的に開発している。人的資源を生かした活動の開発手法は、今後の社会教育においても積極的に採用していくべきと感じた。
- ◇産業教育の場づくり、地域の活性化、地域間交流の推進を目的とした事業で、来訪者が多く、かなりの成果をあげている。 《石原委員》
- ◇廃校の再利用で、これだけ見事に活用しているのを見るのは初めて。食育、農育、文化伝承・創造の場。リピーターとサポーターの多さが、魅力を表している。懐かしさや温かさが来訪者を包みこみ、大人にも子どもにも必要で大切な本物の美しさがあった。 《兎内委員》
- ◇都市と農村、自然環境の保全と観光事業との共生など、数々の課題と真剣に取り組んでいる。社会教育の充実には多くの課題があるが、山村に流れるゆったりとした空気のように、着実に乗り越えており、多くのヒントが得られる事例である。 《荒瀬委員》

⑫ はちのへ子ども劇場

訪問日：平成21年9月28日

訪問者：兔内佐智子委員
(平間恵美委員)

対応者：委員長 平間恵美さん



- 八戸市を中心に、子育てにかかわる団体を結ぶネットワークを立ち上げ、実行力のある連携・協働を実現。
- 管轄や領域にこだわらず、アンテナを広く張り、事業の充実を図る。
- 地域の学校と、公民館や児童館等の公の施設を結び、地域コミュニティを活性化。

体験活動事業の概要

- 【事業名】幼稚園・児童館連携交流「人形劇公演」
- 【事業主体】はちのへ子ども劇場
- 【活動日】平成21年9月28日（※年5回ほどの例会と自主事業を実施）
- 【活動場所】八戸市小中野児童館
- 【活動内容】劇団ちろりん人形劇「小人のくつや」観劇
- 【参加者】小学生約60名、幼稚園児約40名、地域の大人や幼児約20名
- 【活動費】子ども劇場は入会金500円、月会費1世帯1,000円で運営。

はちのへ子ども劇場は1987年に組織を立ち上げ、1988年から年5回程度の例会（観劇会）を開催してきました。運営費は会費（1世帯月千円）でまかなっていますが、会員は年々減少し、現在100名ほどになっています。会員の減少はそのまま事業の縮小につながりかねないのですが、分野を問わず多方面にアンテナを張り、男女共同参画関係、社会教育関係、福祉関係、経済産業関係など、委託事業や助成金を受けられる機会があれば積極的に申請し、また、地域の様々な団体と結びつくことで、充実した活動を展開しています。例えば、今回社会教育委員が訪問した人形劇公演は、劇団を神奈川県から招き、子ども劇場会員、小中野児童館の学童保育利用小学生、小中野幼稚園児を対象に実施されました。単独では予算的に難しくても、子ども劇場・学童クラブ・幼稚園が、それぞれ応分の負担をすることで開催できています。

代表の平間さんは小中野児童館長であり、地域の幼稚園や小・中学校とのつながりが深く、福祉関係者ともつながっています。また、八戸市の社会教育委員でもあり、読み聞かせ団体にも所属しているため、社会教育関係者や公民館、育児サークル等とのつながりもあります。平成18年には子育て支援団体やボランティア団体のネットワーク「はちのへ未来ネット」を立ち上げ、分野や領域を超えて柔軟に連携協力できる体制を作り、「子どもフェスタ」を成功させました。情報を共有し、必要なときに必要な者同士が協力することで、単独で実施するよりも大幅に手間・時間・資金を省き、それだけ充実した事業を実施することができます。「はちのへ未来ネット」の試みは、教育・福祉・産業などの分野や、民間・行政の垣根を越えた新しいネットワークへと発展していく可能性を示しています。

活動の工夫、特長

- ・必要なときに必要なだけ連携協力できる、ゆるやかだが実行力のある子育て支援のネットワーク「はちのへ未来ネット」を立ち上げ、有効に機能しています。
- ・子どもたちのためになることなら、分野や管轄、領域等にこだわらず柔軟に他団体と連携協力したり、委託事業を受け、それがまた新たなつながりを生み出しています。
- ・親子や子どもたちが、一緒に観劇し、共感、共有することで大きな成果が生まれていると言えます。家族がまとまり、地域がまとまり、その輪はネットワークを通して広がっていきます。

今後の展望、課題

- ・ネットワーク「はちのへ未来ネット」をさらに広げ充実させたい、そのために実際に顔を合わせ一緒に行動する機会をつくっていききたい、とのことでした。
- ・子ども劇場としては、会員の減少と中核となる運営委員の後継者不足が課題です。



学童保育の小学生に諸注意



小中野幼稚園児到着



約 130 名が観劇



人形劇「小人のくつや」

訪問委員感想

- ◇親子で同じものを観て、共有したものを大切にする思いがとても理解できた。
- ◇子ども劇場の活動と児童館での活動をベースに、あらゆる可能性を探って独自のネットワークを作り活動を充実させていく、活動団体としてのコーディネート力に感心した。小中野児童館が地域コミュニティの中核を担っていた。

〈兎内委員〉

⑬ 八戸童話会【八戸市】

訪問日：平成21年8月7日

訪問者：秋庭隆貢委員、荒瀬 潔委員、

(平間恵美委員)

対応者：事務局 蛭子賢治さん ほか



- 大正13年から85年以上続く組織と活動。広く認知され高い評価。
- 時代や会員の構成に応じて工夫し変化していく柔軟性。
- 会員がそれぞれネットワークを持ち、自分の所属する地域や団体に活動。

体験活動事業の概要

【事業名】森のおとぎ会

【事業主体】八戸童話会

【活動日】毎年夏休み最初の1週間（平成21年は7月22日～7月28日）

【活動場所】長者山神社境内で朝5:30～6:30

【活動内容】口演（童話、昔話、創作話、芝居、腹話術などの、あらゆる語り）

【参加者】語り手は童話会の会員。聴衆は広く一般の市民。

【活動費】会員からの会費（年2,000円）と市からの助成金で運営

大正13年（1924年）5月に八戸大火（被災戸数1,400棟、被災者7,000名）が発生しました。被災者の多かった長者小学校の教員有志が、「童話を通して夢を」と、夏休み期間中校庭で童話会を開きました。その後賛同者が集まり、長者山で毎年開催するようになり、今日に至っています。以来、実に85年以上にわたって続けられ、最盛期には2千人以上の聴衆が集まり、今も1週間で千名を超える聴衆が集まります。

現在大人の会員は18名、小学生から高校生の青少年部は27名おり、年1回1週間の「森のおとぎ会」をメインに活動しています。長く活動が続く秘訣は、長者山神社という特別な空間で、夏休みの1週間限定で、多彩な語りがあるという魅力に尽きます。そして、毎年大勢の人が語りを楽しみにして足を運んでくれることが会員の活動意欲を高めています。また、「生の声で語る」ことのみが唯一の決まりで、会員一人一人が自由な発想と工夫で口演しています。話は定番ものから自作ものまであり、また口演も一人語りから集団語り、紙芝居、人形劇、寸劇、音楽を入れたり腹話術まで多種多様です。

テレビやゲームの普及で子どもたちの生活が変化しても、生の声で語り継ぐことのすばらしさを伝えるため、自作童話のコンクールを開き童話集を発刊したり、青少年部の子どもたちで童話の演劇を創ったりと、時代や会員によって活動内容を柔軟に変化させてきました。近年は、江陽、小中野、白銀地区や五戸町など、会員それぞれの地元でもおとぎ会を開催し、長者山から始まった活動は、八戸市内外まで広がり多くの方に支持されています。会員それぞれが別の読み聞かせ団体や子育てサークルにも所属しており、童話会を通じて様々な団体や個人がゆるやかにつながり、そのネットワークは確実な広がりを見せています。

活動の工夫、特長

- ・生の声での語りの魅力、85年以上にわたって同じ場所で同じ時間を共有することのすばらしさが人々を魅了しています。
- ・時代が変わり、社会や子どもを取り巻く環境が変わっても、活動内容の柔軟な変化と、会員一人一人の創意工夫による口演の多彩さで、高い支持を受け続けています。

今後の展望、課題

- ・以前は学校や幼稚園、保育園の先生が会員になっていたが、先生が忙しくなって参加者が減り、若い大人の会員が不足している、とのこと。
- ・青少年部で非常に良い活動をしている、高校卒業後地元に残らないため大人の活動につながらないのが悩みです。
- ・童話会の活動は年1回「森のおとぎ会」のみ。あとは会員個々の活動や、有志による活動で、学校や地域との連携はその個々人によるところが大きい、とのこと。

平成21年度(八戸童話会)

森のおとぎ会(第86回) 長者山 朝5:30開演 〇の茶会は土曜日
 〇の茶会は水曜日

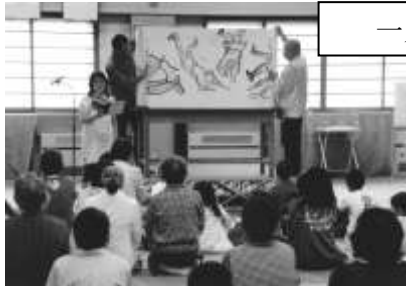
7/22(水)	7/23(木)	7/24(金)	7/25(土)	7/26(日)	7/27(月)	7/28(火)
交通講話			お茶会			懇談会

江陽おとぎの 小中野生き活き 海のおとぎ会(第22回)

7/29(水)	8/2(日)	8/8(土)	8/9(日)
広場 (第12回)	おとぎ会 (第6回)		

江陽児童館広場 常規寺 三輪神社・夢楽殿
 朝6:00開演 朝6:00開演 朝6:00開演

八戸童話会



一人一人の創意工夫による、多彩な口演



訪問委員感想

- ◇早朝の神社境内、異空間での多彩な語りで、歴史的な重みもあり、非常に人気のある活動である。子どもたちの育成にも大きな効果があると考えられる。また、会員一人一人がプロフェッショナルで、地元でも様々な活動をしており、地域に波及効果が表れている。
- ◇組織がしっかりしており、八戸市文化協会事務所の中に事務局を構え、人が集いやすい雰囲気がある。風物詩として市民に認められ、無理に人を集めなくても自然に後継者が現れ、続いていくだけの魅力があると感じた。 《秋庭委員》
- ◇物質文明が幅を利かす時代の中で、異次元・異空間でのお話会は、他では経験できない情緒と感性を育む機会となっている。IT社会が進行する中で、決して衰退させてはならない活動。
- ◇八戸市民が全国に誇る夏の風物詩として市民に親しまれ、子どもたちの体験活動を支援する社会教育の原点ともいえる存在であり、継続の力に敬服するしかない。 《荒瀬委員》